

平成 5 年 8 月豪雨による鹿児島水害時における自主防災組織の対応に関する調査

長崎大学工学部 学正員○阿比留勝吾
長崎大学工学部 正 員 高橋 和雄

1. まえがき 平成 5 年 8 月豪雨による鹿児島災害は土砂災害と都市災害の二面性を持ちハード・ソフト面の防災対策はもちろん、まちづくりに多くの課題を残した。特に、災害時における住民への情報伝達体制の整備が不十分なため、急激な出水に移動手段を失った防災機関は、市民への災害情報の伝達及び避難誘導に困難をきたした。この場合、地区ごとの災害応急活動ができる自主防災組織の活動が重要となってくる。本研究では、災害時の自主防災組織の活動を調査によって明らかにし、ソフト対策のあり方及び自主防災組織の活性化の方法を提案する。

2. 調査の目的と方法 鹿児島市内 117の自主防災組織の代表者に「8. 6 鹿児島水害時の自主防災組織の対応に関する調査」(73項目)のアンケート調査表を郵送により配布した。回収数は 109 (回収率93.2%)である。調査の主な項目については、地区の状況、常々の備え、8月6日当日の対応、被害後の対応などである。

3. 大雨洪水警報の発令について 「8月5日22時10分に大雨洪水警報が発令されたのを知っていましたか」に対して74.3%が「知っていた」と答えており、周知率が極めて高い。自主防災組織の代表者は自主的に情報を集めているといえる。(図-1)。また、「それを何で知りましたか」については、「テレビ」が85.2%と圧倒的に多い。また、「大雨洪水警報を聞いてどう思いましたか」の問に対しては、「警報どおり大雨や洪水が起こるかも知れないと思った」が33.3%に留まっているのに対し、「雨はかなり降ると思ったが、災害が起こるとは思わなかった」が63.3%にも上っており、住民はあまり災害が起こるとは思っていなかったようである。しかし、「度々、警報が発表されているので、またかと思って、重要視しなかった」はわずか 3.7%で、警報慣れというのはなかったようである。

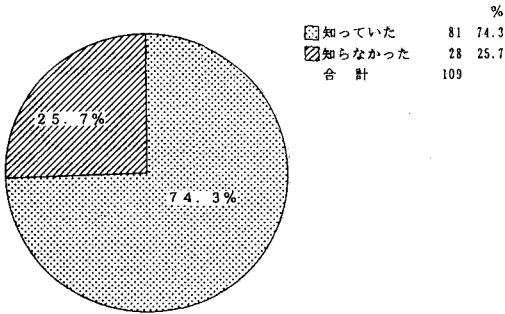


図-1 大雨洪水警報の発令を知っていたか

4. 鹿児島市が行なった避難の呼びかけについて 「鹿児島市では、土砂崩れや浸水の予想されるところに避難の呼びかけをしましたか、このことを当日知っていましたか」という問に対しては、「知らなかった」が56.0%と過半数を占めている(図-2)。「あなたは何で知りましたか」については、「テレビ」55.3%に対し「市の広報車、消防車」は42.6%で半数以下となっており、車が道路冠水で動けないときには、テレビの果たす役割が大きいことがわかる。次いで、「ラジオ」も34.0%を占めており、浸水のため、あまり広報車が回れなかったせいもあるが、行政機関よりもマスコミの活躍が目立つ(表-1)。

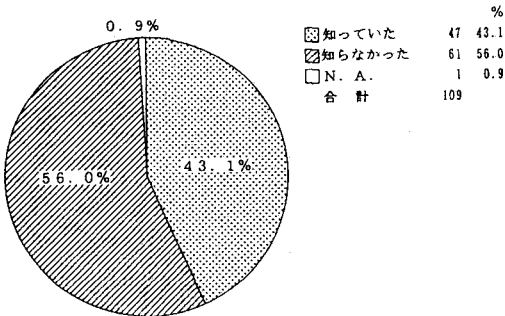


図-2 避難の呼びかけを知っていたか

表-1 避難の呼びかけを何で知ったか

項 目	N = 47 人 (複数回答)	
	人数 (人)	(%)
(1) 市の広報車、消防車	20	42.6
(2) ラジオ	16	34.0
(3) テレビ	26	55.3
(4) 家族	1	2.1
(5) 同僚・知人	5	10.6
(6) 市役所からの電話	3	6.4
(7) その他	1	2.1
(8) N. A.	1	2.1

5. 当日の住民の避難について 「あなたの地区の住民は当日避難しましたか」について、「した」55.1%で、半数以上の地区で住民が避難している。では、「あなたの地区で避難の決め手になったのは、次のどのような理由ですか」という問に対し、「土砂崩れが地区内で発生した」が60.0%で最も多く、「市役所、消防からの避難勧告」の26.7%や、「テレビ、ラジオのニュース」の28.3%を大きく上回っている。今回の災害では土砂崩れや浸水による災害が発生してから避難しているケースが大部分を占める（表-2）。

表-2 避難の決め手となった理由

N = 60人 (複数回答)		
項 目	人数 (人)	(%)
(1) 市役所、消防からの避難勧告	16	26.7
(2) テレビ、ラジオのニュース	17	28.3
(3) 自主防災組織の呼び掛け	21	35.0
(4) 地区内の住民の話し合い	15	25.0
(5) 過去の災害体験	14	23.3
(6) 実際に浸水の水かさが増えてきた	17	28.3
(7) 土砂崩れが地区内で発生した	36	60.0
(8) わからない	0	0
(9) その他	0	0
(10) N. A.	0	0

6. 自主防災組織の対応について 「あなたの地区の自主防災組織ではどのような対応をとられましたか」の問に対しては、「被害

表-3 8月6日当日の自主防災組織の対応

状況の把握」38.5%、次いで、「特に何もしなかった」28.4%となっている。地区での具体的な行動はあまり行っていない(表-3)。また、「災害当日あなたは市役所、消防署警察に電話をかけましたか」についても、「はい」29.4%と約

N = 109人 (複数回答)		
項 目	人数 (人)	(%)
(1) 自主防災組織の動員および指揮	20	18.3
(2) ラジオ、テレビ、行政からの情報収集、地域住民への伝達	29	26.6
(3) 被害状況の把握	42	38.5
(4) 水防作業	4	3.7
(5) 児童、生徒などの住民の避難補助	4	3.7
(6) 避難所での給水、給食	12	11.0
(7) 特に何もしなかった	31	28.4
(8) その他	5	4.6
(9) N. A.	12	11.0

30%が電話を使っている。そして、「電話をかけたときの状況はどうでしたか」の問では、「すぐに通じた」31.3%、「数回で通じた」28.1%、「通じなかった」37.1%となった。地区によってはかなり電話や回線切断輻輳しており、つながらなかったようである(図-3)。

7. 当日の情報ニーズについて 「大雨になったときの気持ちはどうでしたか」については、「非常に不安」50.5%、「多少不安」35.8%と、ほとんどが不安に思っていたようである。また、「大雨が降っているときにどんな情報が知りたかったですか」の問に対しては、「そのときの降雨量や雨の見通しなどの気象情報」の55.0%、「自分の住む地域が大丈夫かどうかという災害予測情報」の53.2%が過半数を占めている(表-4)。「役に立った情報源は何でしたか」については、

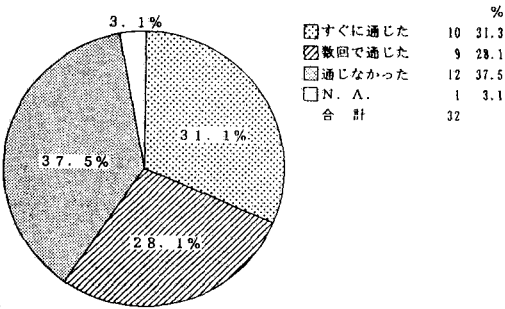


図-3 電話輻輳の状況

「テレビ」70.6%、「ラジオ」

表-4 災害時知りたかった情報

47.7%とここでもやはりマスコミの果たす役割の大きさが伺える。

8. まとめ その他の項目については講演時に発表する。

9. 謝辞 本研究においては、鹿

N = 109人 (複数回答)		
項 目	人数 (人)	(%)
(1) そのときの降雨量や雨の見通しなどの気象状況	60	55.0
(2) 自分の住む地域が大丈夫かどうかという災害予測情報	58	53.2
(3) 自分の住む地域にどんな災害が起きているかについての情報	47	43.1
(4) 家に居られない家族の安否や居場所	37	33.9
(5) 市や消防の応急措置の内容や指示、連絡	25	22.9
(6) 道路・通信・電気・ガス・水道は大丈夫かといった情報	53	48.6
(7) その他	4	3.7
(8) N. A.	3	2.8

児島市防災火山対策課並びに、アンケートにご協力して頂いた自主防災組織の代表者にお世話になったことを付記する。